

学校名	階上町立階上中学校	執筆者名	戸嶋 一智
研究タイトル	プロジェクト・ハシディージーズ ＝受け継ぎ、守り、繋ぐ、未来の階上町＝		

① 育てるべき資質や能力・・・自分で設定した未来を担う子どもたちを育てるべき資質や能力について、その必要性を踏まえて記述する。

主に育成すべき資質/能力のキーワード	探究の過程、環境保全、郷土愛、持続可能な開発
--------------------	------------------------

平成23年3月11日14時46分に発生した東北地方太平洋沖地震は、我が国の地震観測史上最大のマグニチュード9.0を記録した。この地震により発生した巨大津波は、全国の太平洋側のほぼ全域に襲来し、特に三陸地方の各地では内陸部まで押し寄せるなど未曾有の大災害をもたらして、多くの貴重な人命を奪い去った。

震度5強という強い揺れを観測した階上町では、幸いにして人的被害はなかったが、住宅の全壊・半壊はもとより、基幹産業の漁業は、漁業関連施設や漁船、漁労設備などに壊滅的な被害を受け沿岸部を中心に大きな爪痕を残した。

特に本町の大蛇地区では、10.73m（八戸工業大学佐々木教授の調査結果）もの巨大な津波が、地域を襲い、甚大な被害をもたらした。（写真①、②）

そして、平成25年5月、本町地域を含む、被災した三陸地域一帯は、復興貢献を目的とし、三陸復興国立公園として、国立公園に指定されることとなった。まさに、今年度は指定10周年の記念すべき年である。

本町では、太平洋に面した小舟渡海岸部、及び、西部の階上岳がこの国立公園に含まれており、その風光明媚な景観はもとより、地域の独特の環境に適応した多様な海岸植物が生育しているなど、野生生物を間近に観察することもできる。また、その先人たちの努力によりこの地域に根差している自然との共生を目的としてきた独自の生活文化もまた、国立公園に指定された条件の一つであり、防災教育やSDGsの精神を学習する上で、非常に魅力的な教材として活用することが可能である。

このような、人と自然、歴史、文化がふれ合う国立公園のすぐそばに位置しているのが本校、階上町立階上中学校であり、このような恵まれた立地環境は、他の中学校には真似ることのできない非常に魅力溢れる環境である。

そして、また、この地域で生まれ、地域に育てられてきた本校の子どもたちには、将来この地域の自然環境を保全し、地域を活性化していく担い手としての活躍が期待されている。だからこそ、地域を背負って立つ人材の育成は、本校教育活動に課せられた大きな使命であると我々は考えている。

そこで、本研究の中で探究の過程を繰り返し、身近な環境に興味・関心を持つとともに、環境保全のために今自分ができることを考え、自ら地域の活動に関わろうとするSDGsの態度を培いたい。そして、この活動を通して、故郷を愛し、誇りに思う心を育み、将来、地域の持続可能な開発のために尽くす人材の育成につなげたい。



写真①小舟渡漁港付近の津波の襲来



写真②大蛇地区の被害。アスファルトがはがれ、防災無線も倒れている

② 子どもたちの現状・・・子どもたちの置かれている環境や状況、学習レベルなどを客観的に把握することによって収集した情報に基づき、子どもたちの現状について記述する。

まず、生徒たちがSDGsにどれほど関心があるか、実態を把握するためのアンケートを行った。

表1 SDGsに関するアンケート結果（対象：1学年：男子31名、女子39名）

<p>Q1 SDGsという言葉を知ったことがあるか。</p> <p>はい：98%      いいえ：2%</p>	<p>Q2 SDGsの17の目標について知っているか。</p> <p>①ほぼ知っている・・・0%</p> <p>②6割程度知っている・・・0%</p> <p>③3割程度知っている・・・22%</p> <p>④ほぼ知らない・・・78%</p>
<p>Q3 SDGsの目標の中で、関心のある分野を2つ選びなさい。</p> <p>※17の目標を以下の分野別に分類した。</p> <p>①福祉に関すること・・・1、2、3、5、11、16：37%</p> <p>②経済に関すること・・・8、9、10、12：21%</p> <p>③人と人との協力に関すること・・・17：29%</p> <p>④自然環境に関すること・・・6、7、13、14、15：80%</p> <p>⑤教育に関すること・・・4：27%</p>	<p>Q4 なぜ、その目標を選んだのか。</p> <p>※④を選んだ理由一部抜粋</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・階上町は、自然が豊かだから。</li> <li>・階上の自然を調べたいと思ったから。</li> <li>・階上には、どんな自然があるか興味があるから。</li> <li>・地球の環境問題に興味があるから。</li> <li>・階上の自然をこれからも残したいから。</li> </ul>
<p>Q5 小学校では、SDGsについてどんな学習をしたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・4年生で海のごみを減らす工夫を考えた。</li> <li>・5年生で絶滅が危惧される海水生物を考えた。</li> <li>・6年生で地球温暖化による影響を考えた。</li> <li>・階上岳のごみ拾いをした。</li> <li>・白浜海岸のごみ拾いをした。</li> </ul>	<p>Q6 SDGsに関連して、自分が取り組んでいることは何かあるか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いらぬ紙や服をリサイクルする。</li> <li>・買い物する時は必ずエコバックを持って行く。</li> <li>・ゴミの分別。</li> <li>・できるだけご飯を残さない。</li> <li>・使わない部屋の電気は、消すようにしている。</li> </ul>

表1のQ1、Q2の結果から、本校生徒は、SDGsという言葉は知っているが、その目標については、具体的に把握できていないことが言える。これは、近年SDGsがさまざまなメディアで取り上げられていることや小学校での学習の影響が考えられる。ただし、裏を返せば、小学校での学習があったにも関わらず、その具体的な目標の理解はなく、SDGsのその本質的な意味や概念までは理解することができていないと考えられる。

また、Q3、Q4の結果から本校生徒たちは、普段の生活やこれまでの学びを通して地域の自然環境の豊かさに気付いており、その自然について学ぶことに対する興味や関心が高いことが考えられる。また、その理由の中には、階上の自然を後世に残したいという思いをもっている生徒も見られ、地域の雄大な自然によって育てられてきた姿勢も見えてくる。

さらに、Q5、Q6の結果より、小学校でSDGsをテーマに地球規模での環境問題について学習した経緯があり、ごみ拾いという地域の環境保全活動にも取り組んでいたことが分かった。また、普段の生活の中では、3Rsの観点について実践している生徒が多いことも分かった。

以上から、生徒の興味関心や小学校での学習との系統性、そして、身近な生活との結び付きという視点から、階上町内の三陸復興国立公園や国立公園にまで指定されることとなった地域文化を教材として取り上げ、総合的な学習の時間を活用し、授業を構想していくこととした。

**③ 教育支援の方針・・・収集した現在の情報に加え、過去の実践経験や知見（失敗）なども踏まえ、教育支援の方針を記述する（2～3 ページ程度）**

私は、以前の勤務校でも地域の自然環境を取り上げて学習を展開した経験がある。以下にその概要を提示する。

※2018年度教育実践論文「＝継続＝～地域とコラボレーション！“好奇心”・“探究心”・“向上心”3つの心をもった生徒の育成～」より一部抜粋（執筆者：戸嶋一智）

実践の目玉として取り上げたのが地域河川の「五戸川」である。

実践開始当初、地域河川の歴史を調べる活動を取り入れた際、生徒から「地域で五戸川に詳しい方にインタビューしたい。」という意見が上がった。そこで尋ねたのが地域の河川保全団体「新郷遊魚会会長の梅川和雄氏」である。

五戸川の昔のようすや新郷遊魚会が取り組んできたことなどを分かりやすく説明していただいたことで生徒の五戸川に関する意識や関心が向上した。そして、このインタビューを通して、新郷遊魚会と協力して五戸川の保全活動を行った。

《実践例》

①中3年総合的な学習の時間「地域の環境はどうなっているか？」

梅川和雄さんを外部講師として招き、五戸川の過去の様子や現状を教えていただいた。

講義後には、蛍再生のための水路整備や水路の水質調査を行い、地域の人材や自然と触れ合いながら、自分たちが住んでいる地域を流れる河川の現状を科学的に捉え、見つめ直すことができた。

②全校総合的な学習の時間「五戸川環境保全講義・演習」

青森県三八地域県民局地域農林水産部の方々を外部講師として招き、五戸川の地形やようす、現状などを教えていただいた。五戸川の水質を実際に確認し、五戸川の環境を守っていくことの大切さなど、五戸川の環境保全についての講義・演習を実施した。

③中学3年理科「五戸川の上・中・下流域で見られる生物はなぜ違うのか？」

五戸川のそれぞれの流域に見られる生物を提示し、流域によって見られる生物が違うことをCODパックテストを通して考察した。

④理科研究と五戸川保全活動

毎年数名の有志を募り、五戸川のゴミ拾いと調査を新郷村の集落地7.5kmの範囲と水源地にて行った。調査は、水質調査と水生生物調査を行っている。これらの活動は新郷遊魚会の方々からのアドバイスを受けながら共同で行っている。さらにこの調査活動に加えて、毎年テーマを変え河川の水質改善に向けた理科研究にも取り組んだ。

などがあるが、その後、この活動は、村を上げて蛍の鑑賞会をイベントとして行うまでになった。

この実践経験を踏まえて、今回の実践で改善していきたい課題を以下の3点と考えた。

(1) 探究課題の設定

前回の実践では、「学習教材や学習活動をどうするか」という点を重視し、その点に私自身の意識が先行してしまっていた。例えば、地域河川や地域人材を活用することを先に設定してしまい、その活用により、きっと生徒の資質・能力の育成が伴うであろうという教師主導型の形になってしまった。より生徒の課題意識や主体性を引き出す工夫が必要であったし、どのような資質・能力を育成するかという具体的なビジョンをもって、計画をするべきであった。

以上より、今回の実践では、「この探究課題でどんな概念的知識が育つのか」という点についての意識を十分をもって計画をしたい。そこで、探究課題が兼ね備える条件を以下の3つに設定することとした。

## 【探究課題が兼ね備える条件】

- |   |
|---|
| ①探究的な見方・考え方を働かせて学習することがふさわしい課題であること                               |
| ②その課題をめぐって展開される学習が横断的・総合的な学習としての面をもつこと                            |
| ③その課題を学ぶことにより、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくことに結びついていくような資質・能力の育成が見込めること |

以上を踏まえ、目標を実現するにふさわしい探究課題を設定したい。

## (2) 教科等横断的な学び

前回の実践では、教科間の連携をうまく図ることができなかった。地域教材を河川としたこともあり、地域の環境保全を水質調査など、科学的な視点のみからアプローチしたため、総合的な学習の時間と理科間での連携にとどまってしまった。この原因として、(1)でも述べたように、具体的な資質・能力のつながりや学習活動とのつながりを明らかにすることができなかったからだと考えている。

そこで、単元名だけを繋げるのではなく、育まれる資質・能力ベースでどこが繋がっているのかを明らかにするために、総合的な学習の時間の単元の計画を作成する際に、各教科のねらいや学習活動を盛り込みたい。具体的な資質・能力が、どこどのように繋がっているのか、各教科の学習活動とどこがどの時間で繋がっているのか、また何時間くらい必要なのかを具体的に明記することとする。

## (3) 思考ツールと ICT の活用

前回の実践では、各学習活動において基本的にブレインストーミングと KJ 法のみを活用し、思考活動や言語活動を行ったため、考えるための技法と ICT を効果的に活用し、生徒が考えたり共有したりできるように工夫することが大切であると考えている。

特に、総合的な学習の時間では、整理分析の段階で考えるための技法が多く使われることとなる。そこで、ここでは、各教科の見方や考え方を活用することや、考えるための技法を活用する際に補助となる様々な思考ツール(下表2)を提示し、生徒が、学習内容にあったものを選択することで、探究の過程を補助し、より主体的対話的で深い学びが実現されるようにしたい。

表2 思考ツールの例

考えるための技法	思考ツール	考えるための技法	思考ツール
順序付ける	ダイヤモンドランキング	理由付ける	クラゲチャート
比較する	ベン図	見通す	ステップチャート
分類する	Xチャート、Yチャート	具体化する	ロジックツリー
関連付ける	コンセプトマップ	抽象化する	グルーピング
多面的に考える	フィッシュボーン	構造化する	ピラミッドチャート

また、ICTの活用として、Googleのジャムボードアプリを活用して話し合いを行ったり、テキストマイニングを用いて、意見を集約したりすることで、より思考が深まっていくと考えられる。

さらに、Googleのスライドアプリを活用し、プレゼンテーションを作成してまとめを行うことで、情報を再構成し、自分自身の考えや新たな課題を明らかにさせたい。

そして、プレゼンテーションでまとめ発表を行うことを通して、探究の過程や自分の考えを分かりやすく伝えるための表現力、その中でも順序立てて論理的に分かりやすく相手に伝えるための力を育みたい。

④ 実行計画と準備状況・・・教育支援の方針をもとに、「自分がいつ、何をどのように行うのか」具体的な実践や行動に落とし込み、来年度以降の実行計画と準備状況を明確に記述する。(3～4ページ程度)

具体的な工夫のキーワード 総合的な学習の時間を軸としたより確実な資質・能力の育成

総合的な学習の時間 単元指導計画(中1学年)

単元の目標	階上の生態系を守るための対策や事業について学ぶフィールドワークを行い、地域の人や専門家らとの関わりを通して、身近な自然環境が様々な方々や活動によって保全されていることを理解し、地域の自然環境を「後世まで保全したい」、「よりよくなりたい」、「そのためにできることは何か」などと目的と方法を関連付けて考えながら構想することができ、自ら地域の活動に主体的・協働的に関わろうとする態度を培う。	
単元名	プロジェクト・ハシディーゼズ = 受け継ぎ、守り、繋ぐ、未来の階上町＝	
指導内容	① 階上町の自然環境の現状(過去～現在) ② 自然環境フィールドワーク、調査、まとめ活動等 → 文化祭発表 → 環境フォーラム2024開催	
月	学 習 活 動 ○主な支援 ●主な評価	教科との連携
4月	(0) アンケートの実施 (1) ガイダンス ・活動の大まかな流れの確認 ・SDGsや地域の自然環境の確認	
5月	(2) フィールドワーク事前学習①(小舟渡海岸編) 地域に起こっている自然現象について知り、今の景観が将来的に保てるのか興味・関心をもつ。 フィールドワークは、三陸復興国立公園内の小舟渡海岸付近で行う。 担当講師:北奥羽自然史研究所 所長 高橋 晃 氏 ○今の景観を保存するためには、人が適切に手を加えていることに気付くようにする。 ●身近な自然の現状と課題について関心をもっている。 (3) フィールドワークを通して学ぼう①(小舟渡海岸編) ・地域の人や専門家とともに、クラス単位でフィールドワークに参加する。 ・生態系の保全を考えるに当たり、歴史、文化、地形の特色と、獣害対策個体数調整との関連を見いだそうとする。 ・生態系保全のための今後の課題について考える。 ○実際に海岸に入り、課題の実態やその原因について説明を受けながら自分の目で確かめ考えさせる。 ○生態系の保全のため人の手による自然環境の整理の必要性に着目させる。《生態系の保全》 ●生態系を破壊する様々な要因と長期間にわたる人々の働き掛けや社会の仕組みを関連付け現在の三陸復興国立公園が抱える課題について考えようとしている。	【理科】 生物の観察と分類の仕方についての観察・実験などを通して、いろいろな生物の共通点や相違点を見いだすとともに、生物を分類するための観点や基準を見いだして表現しているなど、科学的に探究している。

<p>6 月</p>	<p>(4)フィールドワークの振り返りと自分たちの考えをまとめよう①(小舟渡海岸編)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・フィールドワークでの学びを振り返る。</li> <li>・グループごとに課題を設定し、新たな疑問点について調べたり、自分たちが考えたりしたことをまとめる。</li> <li>・クラス内発表会を実施し各グループからの発表をまとめ報告会に向けて発表内容を吟味する。</li> </ul> <p>○学習を振り返り気付きや発見を整理する。</p> <p>○現状の課題について問題意識を持ち、その解決策についてグループで話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●課題について必要な情報を集め、自分たちの考えをまとめようとしている。</li> <li>●グループで話し合い、協働して取り組もうとしている。</li> </ul> <p>～流れ～</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実際に歩いて気付いた海岸の様子</li> <li>・小舟渡海岸に生息する動植物や獣害</li> <li>・海岸を守るための保護事業</li> <li>・地域の人々の取組や海岸や地域に対する思い</li> <li>・長い歴史の中で維持され続けてきた海岸の景観を保護することに対する懸念</li> <li>・海岸を利用した地域活動</li> </ul> <p>(5)フィールドワーク事前学習②(階上岳編)</p> <p>地域に起こっている自然現象について知り、今の景観が将来的に保てるのか興味・関心をもつ。</p> <p>フィールドワークは、三陸復興国立公園内の階上岳付近で行う。</p> <p>☆階上岳山頂付近</p> <p>担当講師:環境省自然保護官 西澤 文華 氏 自然保護官補佐 大友 千夏 氏</p> <p>○今の景観を保存するためには、人が適切に手を加えていることに気付くようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●身近な自然の現状と課題について関心をもっている。</li> </ul>	<div data-bbox="1142 203 1449 528" style="border: 1px solid red; padding: 5px;"> <p><b>【国語】</b></p> <p>必要に応じて記録したり質問したりしながら話の内容を捉え、共通点や相違点などを踏まえて、自分の考えをまとめている。</p> </div> <div data-bbox="1142 539 1449 936" style="border: 1px solid red; padding: 5px;"> <p><b>【家庭】</b></p> <p>地域の人々と協働し、よりよい生活の実現に向けて、地域との関わりについて課題解決に主体的に取り組んだり、振り返って改善したりして、生活を工夫し創造しようとする。</p> </div> <div data-bbox="1142 1133 1449 1563" style="border: 1px solid red; padding: 5px;"> <p><b>【理科】</b></p> <p>身近な地形や地層岩石の観察について問題を見だし見通しをもって観察、実験などを行い、地層の重なり方や広がり方の規則性などを見だして表現しているなど、科学的に探究している。</p> </div>
<p>7 月</p>	<p>(6)フィールドワークを通して学ぼう②(階上岳編)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の人や専門家とともに、クラス単位でフィールドワークに参加する。</li> <li>・生態系の保全を考えるに当たり、歴史、文化、地形の特色と獣害対策、治山事業や適地適木、個体数調整との関連を見いだそうとする。</li> <li>・生態系保全のための今後の課題について考える。</li> </ul> <p>○実際に海岸に入り、課題の実態やその原因について説明を受けながら自分の目で確かめ考えさせる。</p>	

<p>8月</p>	<p>○生態系の保全のため人の手による森の整の必要性に着目させる。《生態系の保全》</p> <p>●生態系を破壊する様々な要因と長期間にわたる人々の働き掛けや社会の仕組みを関連付け現在の三陸復興国立公園が抱える課題について考えようとしている。</p> <p>(7) フィールドワークの振り返りと自分たちの考えをまとめよう②(階上岳編)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・フィールドワークでの学びを振り返る。</li> <li>・グループごとに課題を設定し、新たな疑問点について調べたり、自分たちが考えたりしたことをまとめる。</li> <li>・クラス内発表会を実施し、各グループからの発表をまとめ、報告会に向けて発表内容を吟味する。</li> </ul>	<p><b>【国語】</b></p> <p>必要に応じて記録したり質問したりしながら話の内容を捉え、共通点や相違点などを踏まえて、自分の考えをまとめている。</p>
<p>10月</p>	<p>○学習を振り返り気付きや発見を整理する。</p> <p>○現状の課題について問題意識を持ち、その解決策についてグループで話し合う。</p> <p>●課題について必要な情報を集め、自分たちの考えをまとめようとしている。</p> <p>●グループで話し合い、協働して取り組もうとしている。</p> <p>～流れ～</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実際に歩いて気付いた山の様子</li> <li>・山に生息する動植物や獣害</li> <li>・山や周辺の自然環境の変化</li> <li>・山を守るための保護事業</li> <li>・地域の人々の取組や山や地域に対する思い</li> <li>・長い歴史の中で維持され続けてきた山の景観を保護することに対する懸念</li> <li>・山を利用した地域活動</li> </ul> <p>(8) ここまでのまとめを文化祭で発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・文化祭ステージ発表で、カチカチ山をモチーフとした劇を行い、自然との共生や持続可能な開発について学習したことを伝える。</li> <li>・文化祭学年展示で、三陸復興国立公園のある階上町の魅力をPRする。</li> </ul> <p>(9) 環境フォーラム2024の発表に向けて発表準備を進める。</p>	<p><b>【社会】</b></p> <p>各地における人々の生活の特色やその変容の理由を、その生活が営まれる場所の自然及び社会的条件などに着目して多面的・多角的に考察し、表現している。</p>
<p>2月</p>	<p>(10) 1年間学んできたことの報告会【環境フォーラム2024】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループごとに追究した課題とその解決に向けての自分たちの考えを報告し共有する。</li> <li>・フィールドワークで学んだことを通して、未来のために今自分にできることについて考えを深める。</li> <li>・参観日に設定し、保護者の方々へも活動の様子をお伝えする。</li> </ul> <p>●身近な自然環境に興味・関心を持ち、将来的に自然と調和して生きるために自分にできることは何かについて考えを深め、伝え合おうとしている。</p>	<p><b>【国語】</b></p> <p>自分の考えや根拠が明確になるように話の中心的部分と付加的な部分、事実と意見との関係などに注意して話の構成を考えている。</p> <p>相手の反応を踏まえながら、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫している。</p> <p><b>【英語】</b></p> <p>外国の観光客への紹介や注意喚起のために、国立公園でのマナーや紹介について、事実や自分の考えを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書いている。</p>

## (1) 外部講師紹介

## ① 小舟渡海岸

担当講師:北奥羽自然史研究所 所長 高橋 晃 氏



元高校教諭。三陸の空間・時間を縦横にめぐるジオストーリーをガイド。植物研究者の視点から、進化と命を繋ぐ舞台としてジオをお話する。地球の歴史・文化・民族のお話、自転車で巡るジオの解説者。H28年4月～6月に46日間かけて、フランスのルルドからキリスト教の巡礼地スペイン・ガリシア州のサンティアゴ・デ・コンポステーラまでの1,100キロメートルを踏破するなど多方面で活躍。

## ② 階上岳

担当講師:環境省自然保護官 西澤 文華 氏  
自然保護官補佐 大友 千夏 氏



三陸復興国立公園の保護管理や野生生物の保護・里山の保全をしている。レンジャーとも呼ばれ、八戸自然保護官事務所などで勤務している。

以上、2名の方へはすでにアポイントをとっており、高橋先生には、小舟渡海岸を御担当いただき、自然保護官の方々には、階上岳を御担当いただく予定である。その他に、地域には、具体的に自然環境に関するSDGsを実践されている方々は、たくさんいらっしゃるため、そのような方々へもお声掛けし、講話や生徒たちとの座談会、リモート対談などをお願いしたいと考えている。

## (2) 地域教材の設定

三陸復興国立公園は、青森県南部から宮城県の大鹿半島に至る三陸海岸一帯を占める国立公園。東日本の国立公園では唯一ともいえる本格的な海岸公園である。

2011年に発生した東日本大震災による津波で指定区域が大きな被害を受けたことを受け、震災からの復興および被害の伝承を目的として、2013年に青森県の種差海岸階上岳県立公園及び八戸市鮫町の2地区を編入の上、現在の名称に改められた。

「国立公園の創設を核としたグリーン復興」三陸復興国立公園の創設をはじめとした様々な取り組みを通じて、森・里・川・海のつながりにより育まれてきた自然環境と地域の暮らしを後世に伝え、自然の恵みと脅威を学びつつ、それらを活用しながら復興を目指している。

## ①小舟渡海岸について（右写真：磯の様子）

【地形・地質】砂浜、岩石海岸からなる地域である。階上海岸は階上海成段丘として三陸ジオパークのジオポイントに指定されている。

【動植物】県道1号線沿いの岩礁にはアオイワレンゲ、ハマ





ボス、スカシユリ、アサツキ等が、泊川神社近くには塩生植物が、段丘上部にはノシバ群落がみられる。小舟渡のシバ草原や全体に点在する岩石海岸にハマヒルガオ、ハマナス、ニッコウキスゲ、スカシユリ、ウミミドリ等の海岸植物群落が発達している。

【歴史・生活文化】漁業がさかんな地域であり、初夏のアワビ・ウニの口開け、昆布干し、11月頃のイカ漁の漁火等の季節ごとの漁業風景を見ることができる。毎年7月には郷土料理のいちご煮（ウニとアワビの潮汁）をふるまう「はしかみいちご煮祭り」が開催される。過去の津波の経験から、「ほら逃げろ 津波の時は 線路まで」という避難方法が語り継がれている。また、泊川神社付近の高台や赤石大明神等には、津波記念碑が建立されている。アワビ、ウニの口開けとは、漁の解禁のことを表し、乱獲防止につながるまさにSDGsを表している。

【保全・普及啓発活動】漁業者による漁業管理として漁業監視活動が行われている区域がある。町や関係者による清掃活動や自然観察活動、関係者による子供たちを対象にした自然観察学習「海の学校」等が行われている。

【利用状況】トレッキング、磯遊び、いちご煮まつりの開催等が見られる。

【主な保全対象】シバ草（小舟渡）、海岸植物群落（大蛇、榊、泊川神社、観音平等）、岩礁海岸（大蛇、榊～泊川神社、小舟渡等）、階上海成段丘（ジオポイント）

## ②階上岳（右写真：頂上からの絶景）

【地形・地質】階上岳は北上山地最北の山であり、牛が寝そべっているような山容から臥牛山とも呼ばれる。標高は739.6mで、稜線は青森・岩手県境となっている。地質は下部が粘板岩、チャート等で、中腹から上は花崗岩である。花崗閃緑岩が三陸ジオパークのジオポイントとして登録されている。



【動植物】中腹部のつくし森及び頂上付近には、北上山地の典型的な二次林であるミズナラ、コナラ、シラカンバ等の広葉樹林が広がる。大規模な伐採や山火事後に発達するシラカンバ林がパッチ状に点在し独特の景観をなしている。その他の地域は、スギアカマツ、カラマツ等の針葉樹林となっている。林床には、シラネアオイの群生、フキやゼンマイ等の山菜等が見られる。8合目の大開平にはヤマツツジが群生し、6月頃には朱色の絨毯を敷き詰めたような景色が広がる。沢沿いには崩落地に発達するヤグルマソウの群生が見られる。一帯にはニホンカモシカ、キツネ、タヌキ、ノウサギ等のほ乳類が生息している。春と秋の渡りの季節にはマヒワやキビタキカシラダカ、ツグミ等の小鳥の大群が中継地として利用している。また、国立公園外も含め階上町内には巨木古木が数多く生育する。

【歴史・生活文化】本来の植生はブナ林であったが、ミズナラ・コナラを主とする薪炭林、スギの植林地として変遷してきた。かつて林間放牧や炭窯での炭の生産も行われ、里山として地域住民と共存してきた山林である。現在では、主に登山や放牧（町営牧場）といった形での関わりが続いている。東麓には神仏混交の霊地として古くから地域住民に信仰されてきた寺下観音がある。また近くには、享保15年(1730年)に建立されたと伝えられている灯明堂の跡地があり、三陸ジオパークのジオポイントとして登録されている。公園区域外も含めた階上岳の山麓部では「階上早生」というヤマセがもたらす冷害に強いソバの栽培が盛んである。

【保全・普及啓発活動】階上町、関係者、登山者による清掃活動が行われている。8合目付近の大開平や頂上付近では、階上町によって景観向上のための植生管理が行われている。

【利用状況】身近な里山として子どもからお年寄り、個人から登山愛好団体まで様々な主体が年間を通して登山を行っている。トレッキングイベントや清掃登山等の催しが階上町をはじめとした関係者主催で行われている。ヤマツツジが満開となる6月には、階上岳の麓で「はしかみ臥牛山まつり」が行われ階上岳周辺ではソバの手打ち体験が行われている。階上岳山頂や南岳、大開平等からは八甲田連峰、八戸市街地、太平洋、岩手山、北上山地の山々を展望できる。

【主な保全対象】階上岳の山容、ヤマツツジやシラネオアイ等の植物群落、ミズナラ、コナラ、シラカンバ等の広葉樹林、ジオポイント（花崗閃緑岩、つつじ群生地、階上岳龍神水（頂上付近の湧水）、寺下の滝）

### （3）探究課題の設定

探究課題	地域の活性化に携わる人々の考えや取り組み、地域に住む人々の思いや願いと未来構想
単元の目標	<p>階上の生態系を守るための対策や事業について学ぶフィールドワークを行い、地域の人や専門家らとの関わりを通して、身近な自然環境が様々な方々や活動によって保全されていることを理解し、地域の自然環境を「後世まで保全したい」、「よりよくしたい」、「そのためにできることは何か」などと目的と方法を関連付けて考えながら構想することができ、自ら地域の活動に主体的・協働的に関わろうとする態度を培う。</p> <p>※知識及び技能    思考力・表現力・判断力    学びに向かう力、人間性等</p>
SDGsの精神との関連	<p>自然環境を保全していくことが、様々な方々や活動によって保全されていることを知ることで、地域の自然環境を「後世まで保全したい」、「よりよくしたい」、「そのためにはどうしたらよいか」を考えていく。</p>

自然環境の保全という総合的な学習の時間のテーマが、実は、住んでいる街の活性化に繋がっていることや自然環境を生かした観光戦略にも繋がり、未来の階上町の活性化に向かっていることにも気付かせたい。

### （4）今後の実践に向けて

ダーウィンが進化論を唱える際にも、フィンチ類の入念な比較研究がもとになっていることから、「見方や考え方」を働かせることは、科学的な探究には欠かせない道具だと言える。

つまり、「見方・考え方」が、子どもの発達にとっての足場づくりに役立ち、子ども自身が思考・判断・表現の道具として活用できるようになることが必要である。そこで、総合的な学習の時間を通して各教科特有の見方や考え方を総合的に働かせながら探究のサイクルを回していくことで、より主体的対話的で深い学びが実現され、より確実な資質・能力の育成に繋がると考えている。

このような実践を通して、この町に育てられ、生かされてきた子どもたちに、生まれ育った故郷への愛着を育み、たとえ一時、故郷を離れたとしても、ふと気付いたときに、故郷のためにと思い行動する気持ちが心の中に刻み込まれるような実践をしていきたい。